



痛み分けたいという思い

この投稿をした時、「かわいそう」と同情だけで済ませたり、高いところから見物しているのではなく、彼らと痛み分けたいという思いがありました。

「なぜ、私ではなくてあなたが」という考え方は、精神科医で、ハンセン病患者への支援を続けていらした神谷美恵子さんの「生きがいについて」という本で出合ったものです。

子育てをしていた30代、親戚やママ友達との付き合いの中で揺れ動き、一人の人として成長したいという思いが強くなっていった時にこの本を読んで、こういう考え方があるんだと、自分が開かれていくような気がしました。



閑静な住宅街の中にある素敵な本屋「Door」

なぜ私でなく

あなたがという考え方

Interview

松江市内で新型コロナウイルスの感染者が増加し、動揺や不安が広がっていた昨年8月、SNSに投稿された高橋香苗さんの文章を紹介いたします。高橋さんご自身の子育てについても、お話を伺います。

高橋 香苗さん
-Profile -
DOOR オーナー
結婚を機に松江へ。
イベントの企画運営・出版も手がける

DOOR
島根県松江市上乃木1-22-22
Tel. 0852-26-7846
営業日は、インスタグラムdoorst.margaretにてご確認ください。

日本人は、素直で生真面目に決められたルールを守る意識が高い一方で、そこから外れたことや、突発的なことに対して融通が利きにくい面がありますよね。

思いやりよりも先に批判が大きくするのは、溜まっていた窮屈感や恐れといった負の感情が、弱いところに向かって吹き出してしまうのだと思います。

自分ごとを考えず、何かや誰かのせいになっていると、そんな風に弱いところにシワ寄せをしがち。経済優先の時代が続いた今、そのシワ寄せが特に子どもにきてしまっているように感じます。

自然や本、寺や神社といった、抛りどころになるものとのつながりで心を安定させ、家庭や地域での困らんで、思いやりを持つて高め合える関係を持つ。そういう輪が広がる、本当の安心感や未来への希望が得られる社会になるのではないのでしょうか。

高橋さんご自身の
子育てについて

我が家は娘がひとり。少し前に入籍したばかりです。おとなしく言うことを聞くタイプではなく、自分のお腹から生まれても、全然別の人格を持っていて、思い通りになんか1ミリもならないと痛感しました。

思い出深いのは、娘が3歳の時に玉峰山へ登山したこと。途中何度も「歩一歩」と言いながら頂上まで登って。

大きくなった今でも、彼女が悩んだり、行き詰まりを感じているような時に「歩一歩しかないね」と話します。

情報と直感

今は、誰でもたくさん情報を収集できるようにになりました。外から一番良い答えを探して選び、結果や様子をまた外に発信するまでが一連の流れのようになって。でも、そればかりだと自分の意志を確認したり、選択することができなくなってしまう。

特に女性は情報を組み立てて考察して選択するより、直感で進めるほうが合っている人が多いように思います。大切なのは、自分がどうしたいか、子どものことならその子がどうしたいかということ。



本はもちろん、高橋さんのセレクトするモノや人との出会いを求めて県外からも人が訪れる

子育て世代のみなさんへ

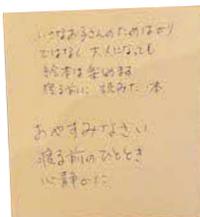
一人ではできない経験をして、親も成長し、親子の関係性も年々変わっていきます。

寄り道をしながら、ゆっくり歩いた時の景色や音。一緒に見た夕日や星空。

人間形成の要になる小さい時期に、「きれいだね」「おいしいね」と感動の共有をする経験をして、この世の美しさを感じてほしいと願います。心の栄養は善いものとして残っていき、知的な成長にもつながります。

じっくり向き合うムダな時間こそ、豊かさの実感ができる。親子で、そんなかけがえない時間を過ごしてもらいたいと思います。

店内の絵本に添えられた高橋さんの手書きメモからも温かな人柄が伝わってくる



「松江における新型コロナウイルスの感染者が1日で90名を超えた、というにわかには信じがたいニュースが流れた。最初は耳を疑ったが、事実が明るみになるにつれて、高校の寮生が中心の集団感染だとわかり、かかった高校生になんだか心が痛んだ。この高校は、個人的にとっても好きな神社の裏山、つまりご神域内にあえて建てられた高校だ。よく、そこに通う高校生は普段から、だれかれとなく神社に参拝に来る人などすれ違う人たちには大きな声で挨拶してくれる。中には深々と頭を下げ通る生徒もいる。そんなこともあって、個人的には、この生徒さんたちがこの先肩身の狭い思いをしなればいいなと思ってしまう。

感染症は誰がなってもおかしくないもの。みんなが素行が悪いからかかるわけではない。いろんなケースが複雑に入り混じっている。一つ一つ、事情があつてのこと。他者への配慮に欠けた行為は避けなければいけないが、注意をしてもかかってしまうこともある。

昔、読んだ本に、病氣や怪我、事故、災害など、不意にやってくる災いを被った他者に対して、「なぜ、私ではなくてあなたが」と問いかけることで、その他者へ同情ではなくて、よく代わりになってくださって、という気持ち自然にわくことで見方が変わる、とありましたが、親元を離れて日々部活や学業を一生懸命している高校生がはからずもコロナウイルスに感染したことに、私ではなくてなんでこれからの若い人たちが、と問いかけてみる。同じ地域に住む者として、冷静にいたわりを持って受け止めていきたい。」

—高橋香苗さんの投稿より—